

文化情報誌

# たわわ

2024 No.121

「たわわ」というタイトルには「小さな情報がたくさん集まって多くの実を結ぶように」という期待が込められています。

つなぎ 挑み 舞い踊る



## 市川流寿会舞踊教室

### 3代目家元 市川千代若さん

市川流寿会舞踊教室の家庭に生まれ、赤ちゃんの頃から初代家元である祖父のあぐらの上に座って舞台を見ていました。初舞台は6歳の時です。小さい時は教室を継ぐことが夢でしたが、小学校高学年から中学生頃までは「和」に対して「ダサい」というイメージを抱いている時期もありました。

中学校の時に進路の話になり、高校へ行きたいという思いが無い中で、2代目家元である祖母から「歌舞伎の世界に行ってみないか?」と言われました。ただただワクワクしたのと楽しそうだなという思いから、国立劇場伝統芸能伝承者養成所という歌舞伎俳優の養成課程に第15期生として入学しました。

舞台ではその他大勢の役でしたが、「どうしたらもっとリアルな衣装になるか?」とアレンジを色々と考えて試したり、主役から投げ飛ばされた際に行う「とんぼ返り」という宙返りの練習をものすごくしていました。本番で成功した時に拍手が起こると、楽しくて辞めたくないという思いになる一方で、自分も主役級のことをやりたいというジレンマもありました。

3代目を継ぐ話ができたのはちょうどその時期でした。家を継がなければ教室は無くなってしまおうし、このまま歌舞伎の世界にいたら主役はできなかつたので割とすんなり帰ってきました。そこから3年くらい家元を継ぐための準備として舞踊に没頭し、23歳で3代目家元を襲名しました。

そこからは現在に至るまで、お稽古でお弟子さんに教えることと発表会での舞踊をメインにやっています。お稽古では、お弟子さんが踊りきれte喜んでる姿を見ることにやり



お稽古場での様子  
(前正面 市川千代若さん)

がいを感じるのと、それぞれのお弟子さんに合わせて「最高の踊りを見せるには、この人にどういった振りを付けたらいいのか」を考えることが工夫のしがいもあって楽しいです。

僕が女形を表現するときは「目」にこだわっています。「目は口ほどに物を言う」と言いますが、例えば、僕が舞台上がってお客さんを見る時には、お客さんが恥ずかしくて目を逸らしてしまうくらい「生きた目」を向けるようにしています。これはお弟子さんにも必ず教えることの一つです。

伝統的な日本舞踊はもちろん大切にしているのですが、ある時「ちょっと物足りないな?」と思い、ギタリストの後輩と「一回やってみよう!」とギターに合わせて踊ってみたのをきっかけに、尺八やお琴とのコラボレーションや現代曲で舞うスタイルが生まれました。これは、以前からずっと、もっと若い人、幅広い世代にも発表会を見てもらいたいと思っていたので、自然と新しいところへ向かっていったのかなと思います。

舞踊というジャンルはもっと大きな可能性があると思っています。若い世代にも「格好いい」とか「美しい」とか「素敵」と思ってもらいたい。それに向けて一番わかりやすいのが、若者向けの音楽で舞うということでした。

歌舞伎の世界で過ごしたことや、生まれた時から師匠である祖父・祖母の踊りを見て育ったことも含めて、ずっと「舞う」ということについて学んできているので、どんな質問がきても自分の中では自分なりの答えを持っています。なので、新しいことをすることに恐怖や不安というものはあまり感じず、ワクワクしています。

僕は、平塚を出て何かやろうと思ったことはないんです。東日本大震災のときも、アーティストはいっぱい現地に赴きましたが、頑なに全部お断りしました。もちろん、現地に行き、勇気づけたいという思いはありましたが、市内で踊れる機会があるのであれば、自分の舞いを見せるのはまず地元かなと思っています。ここまでの『千代若』を作っていたのは「平塚のお客さん」なので、「千代若さんが



平塚万博2023-ICHIGO ICHIE  
での様子

出るなら行きたいわ」とチケットを買ってもらって、「千代若さん素敵だわ」と言ってくれるのは平塚のお客さんです。舞台やステージの上で踊りながら、前列の一人ひとりのお客さんの目を見ると本当に応援していただいていると感じます。地元には恩があるので、平塚の人たちに発信していきたいという思いがありますね。

平塚にゆかりのあるアーティスト達が集まって開催した「平塚万博」では、全ての演出を担当しました。舞台の構成や、舞台に設置する障子の提案など、座長として力を注ぎました。

これからは、若い人たちに向けて何かバックアップしていきたいとも思っていて、プレイヤーでもありますが、プロデューサーを兼ねるとするのが今目指しているところです。伝統文化や、芸術、音楽などいろんなもので「平塚にはこういった人達がいるんだよ!」ということをもっとアピールして、若手の活動に何かプラスになればいいなと思っていますし、脚本や演出を僕らの世代がやって、みんなで作り上げていく、そういうものを平塚でやっていきたいなと思います。もちろん日本舞踊の教室も発展させて、若い人たちにも教えていきたいです。

#### 【プロフィール】市川千代若

平塚を拠点とした市川流寿会舞踊教室の3代目家元。個人としては舞踊女形としても活動し、梅沢富美男などのステージにて前座を務める。また、和楽器バンド「千本桜」のミュージックビデオに出演。平塚では、2022年11月3日に開催した「平塚万博THE HIRATSUKA EXPO～未来を創るArtists～」で座長を務めた。

## 巡って学ぶ平塚学入門 ⑨

### 「どっこい神輿と甚句」

4月に入ると、市内の各神社で例大祭が行われます。市内の58神社（鎮守51社と鎮守以外で神輿が渡御をする7社を合わせた数）の例大祭は、4月に行う神社が28社で一番多く、その次は7月の11社、9月に7社と続きます。

祭りの日には、神輿の台輪についたタンス(環)を激しく打ち鳴らし、それに合わせて「どっこいどっこい」や「どっこいそーりゃ」の掛け声で神輿が担がれます。これに合わせて神輿を上下にもむのが平塚市の神輿担ぎの特徴です。

しかし、これは現在の特徴で、昔から「どっこい」で担いでいたのは須賀の三嶋神社だけでした。それ以外は「わっしょい」が基本でした。昔、寺田縄では「よーとうさっせ、よいとこーりゃさっせ」と蛇行して担ぎ、真田神社の例大祭では現在でも宮出しと宮入りの時には「よいやーさー」の掛け声で担いでいます。

もう一つの特徴は、神輿が神社や神酒所みきしよで発着する際に甚句が唄われることです。甚句は一人が「セ

エ～」と唄い出し、担ぎ手が「よいよい」などの合いの手を入れ、唄い終わると神輿を上下に激しくもみます。市内で古くから甚句が唄われていたのは須賀で、もとは大漁祝いの宴席で唄われていたのが、祭りでも唄われるようになりました。現在では市内の多くの祭りで唄われており、ご当地甚句も作られています。

これらの担ぎ方と甚句が取り入れられていったのは、昭和50年頃から各地の神輿会の交流が盛んになったためです。また、この担ぎ方は藤沢から二宮にかけての湘南神輿の特徴とされています。

祭りが行われる時期になったら、ぜひ各地の祭りに足を運んでみてください。

(平塚市博物館学芸員)



北金目神社の祭礼での甚句  
(2004年4月17日)



須賀の三嶋神社  
(2004年7月18日)

## ひらしん平塚文化芸術ホール 主催事業レポート Vol.3

ひらしん平塚文化芸術ホールで実施している、様々なジャンルの事業の様子をお届けする主催事業レポート。今回は、「インクルージョンSTAGEシリーズ」から、令和5年11月3日に開催した「This is me! これが私! 200人によるゴスペルコーラス」をご紹介します。

このシリーズは、年齢、性別、国籍、障がいの有無に関わらず出演や鑑賞することで、音楽や舞台芸術を通して他者との理解を深め、健康で豊かな地域文化の創造を目指しています。

今回は、ゴスペルシンガーの「三科かをり」さんと三科さん率いる「KWRゴスペルクワイア」を中心に、公募で集まった「市民クワイア」や、キッズダンスグループ「ENJOINTDANCE CLUB KIDS」が出演する本格的なゴスペルコーラスのコンサートを開催しました。

「市民クワイア」には8歳から74歳までの71名が参加しました。三科さんによる3日間のレッスンと前日リハーサルを経て、本番当日の大勢の観客が待つ大ホールの舞台へ。映画「グレイテスト・ショーマン」より『This is me』を素晴らしい歌声で歌い上げました。全出演者が舞台にあがった約200人による大迫力の熱唱と、観客からの大きな歓声と拍手で、舞台と客席が一体化する、まさにインクルージョンなステージとなりました。

終演後のアンケートでは「子どもも大人も楽しそうに歌いおどり、本当に良かった。」「素晴らしいかった。200人のThis is meは大迫力でした。」といった声がありました。令和6年度も誰もが楽しめるインクルージョンなステージをお届けしますので楽しみにしてください。



## リトアニアに行く前に… 平塚の姉妹都市「カウナス」

平塚市は東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のホストタウン交流をきっかけに、リトアニア共和国第二の都市「カウナス市」とこれまで教育分野を中心とした多くの交流を行い、友好関係を築いてきました。そして、2023年11月25日、カウナス市と姉妹都市提携を行いました！今回は、カウナス市出身のジュギーテ・サウレさん（平塚市国際交流員）が、調印式の様子を紹介します。

カウナス市内にあるカウナス城で行われた姉妹都市提携の調印式には、市長をはじめとする平塚市訪問団が出席しました。カウナス城は、14世紀にバルト三国周辺を侵略したドイツ騎士団の攻撃から国を守るために建設されたという記録が残っており、リトアニア国内で最も古い建物の一つです。このゴシック建築の建物の周りに街が形成され、これがカウナス市の歴史の始まりとされています。

当日の天候は雪だったため、カウナス城の様子はとても幻想的でした。そして調印式は、リトアニアの民族楽器「カンクレス」（リトア



カウナス城

ニア語：kankles）の演奏で始まりました。カンクレスは、リトアニアの民族楽器の一つであり、リトアニアの祭りや結婚式で演奏されることが多く、民話や民謡などによく登場します。かつては、人が亡くなった時に、親戚がその人のためにカンクレスを作り、天体をモチーフにした装飾を刻んでいました。

平塚市訪問団は、カウナス市滞在中、2023年9月にユ

ネスコ世界遺産に登録されたモダニズム建築を視察しました。カウナス市は1919年から1939年の間、臨時首都となり、6,000棟もの建造物が建設され、人口も爆発的に増えました。特に1930年代は近代建築運動が盛んな時期で、建造物には初期のモダニズム建築の影響が多く見られます。近代的な首都機能とインフラが集中して存在しており、西欧で教育を受けた新世代の建築家たちがモダニズムを追求するだけでなく、地元の建築様式も取り入れて発展させていったというのが特徴です。

姉妹都市提携を結んだことで、平塚市とカウナス市の絆は、教育、文化、スポーツ等の交流を通し、今後更に深まっていくでしょう。皆さんもカウナス市の魅力と今後のイベントや交流事業に注目してみてください！



姉妹都市締結調印式



民族楽器「カンクレス」



カウナス市内の「モダニズム建築」

### 平塚市文化振興基金に御協力を

平塚市文化振興基金は、市民文化の振興を図るために活用されています。基金に御協力くださる方は、平塚市文化・交流課まで御一報ください。（2023.10.1～2024.1.31までに御寄附くださった方）（敬称略）

- 2023年12月14日 竹遊会
- 2023年12月25日 しんわ本人自治会連合会

発行 平塚市文化・交流課 | 〒254-8686 平塚市浅間町9-1

電話 0463-32-2235 FAX 0463-21-9756 E-mail : bunkoh@city.hiratsuka.kanagawa.jp

令和6年(2024年)2月15日発行 右の2次元コードより文化情報誌「たわわ」へアクセスできます

